
空巢の風紀委員

春寝 暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空巢の風紀委員

【Nコード】

N4898Z

【作者名】

春寝 暁

【あらすじ】

一見何の変哲もない町。空巢町（カラス町）に住む一人のポーカーフェイスの毒舌家にして何事にも深く感心を持たないという事以外は一般人と変わりない主人公と俺「晴智晴之」が電波で不死身な風紀委員長とかDMな副委員長とかヤンデレ幼馴染とかシスコントリガーハッピーとか自称魔女少女（と書いて切り裂き魔）とか。…アレ？おかしいな。変態しかいない！…などなどと共に地元
の摩訶不思議な事件を解決する話である。

状況1 浮浪する少年？

状況1 浮浪する少年

俺こと晴智^{ハルチ} 晴之^{ハルユキ}は夜道を歩いていて。

何をするでもなくただひたすらに歩いていてだけ。目的なんてない。言うなれば散歩みたいなものだ。眠れないので散歩。夢遊病か俺はなんて一人ツツコミを入れながら、今日も空巢町を彷徨っている。目的もなく、ただ真っ直ぐぼんやりと夜道を歩くだけ。

「そこの中学生、待ちなさい」

呼び止めた声は随分と若かった。

ゆっくりと振り返れば、黒髪の少女が街灯の明かりを背に受けて立っていた。

着ている制服は地元の私立高校の制服だ。来年になれば俺も入学するところだった。

……いや。違ったか？幼馴染のパンフで見たのだろうか？制服が力ワイイとか何とか…？

この歳にしてボケとか笑えない。記憶が混乱しているぞ。しっかりしろ。俺。

「こんな時間にこんな所で何している？」

「いや…散歩です。眠れなかったので」

「若いのに夢遊病か？大変だな」

「はあ…」

初対面の人にツツコミを入れられた。

うん。まあ…そうだよ。うん。丑三つ時だしね。

気がつけば知らない場所歩いているなんて「変」以外の何者でもないからね。

「そう。君、名前と学校は？ついでに出席番号」

「空巢公立東中学。3 - 4。晴智晴之。出席番号……は……？」

「どうしたの？覚えてないの？」

「すみません。ちょっと待ってください」

なんてことだ。もう結構日にちも経っているはずなのに出席番号をド忘れするなんて。

今日の俺は俺らしくない。これは本当にボケ老人の症状が出ているのかもしれない。

ああ …… 29? くらいだったかな。9だったのは覚えてる。うっすら。二桁だった。

19? 29? 39? 49? いやいやいやいや。クラスメート多いな俺。

ならならここは無難に……。

「29?」

「わからないなら適当な事を言っな」

「いやいや本当ですって。29番目くらいだったらいいなあって。後ろ過ぎず前過ぎない」

「いいなあってお前の願望じゃん」

「お姉さん。ツッコミ気質ですか。苦労してるんですね」「話を摩り替えるな!」

否定はしなかった。どうやら相当苦労しているらしい。

「じゃ。次。電話番号と住所は？」

「電話番号は

で住所は空巢町4丁目

。

つて言っても親は今海外に行っていて留守ですよ」

「ふうーん。そう。じゃあ中学生三年生にして夢の一人暮らし？いいわね」

「そんな事ないですよ。近所の幼馴染が毎日飯作りに来たり、掃除しに来たりするんで」

「そうか。いい幼馴染だな」

「まあ…悪くはないですよ」

「大切にしろよ。それじゃ」

そのお姉さんは質問した事にメモだけ取ると暗い夜道を去っていった。彼女がつけていた腕章には覚えがある。この土地の御三家が決めた警察とは別の自治組織。

時には暴力で、時には知略で、新しい町長と共にやってきた犯罪者を摘発し住民の生活を護っている正義の味方。

地元定着ヒーローとして名を轟かせるカリスマ的存在だと地元の新聞で読んだと思う。

家に帰ってから確認してみようかなどと思いつつながら俺は帰路についてたのだ。

家に帰れば当然のように明かりがついている。

また合鍵か…否、ピッキングを使って家の中に入ってきたのだろう。どうしてわかるかって？明らかにこじ開けた様な跡が残っていたら原因なんて確定だ。

ちよつと名探偵に慣れた気分だ。真実はいつも一つ！なーんちゃつて。

冗談はここまでにして、幼馴染が俺に対して遠慮というものを知らないのはよく知っているというか、もう慣れっ子だった。

鍵を壊されたり、窓の一部が破壊されたりして不法侵入する以外は掃除も料理も洗濯もやってくれるのでとても助かっている。

幼馴染サマサマだ。けれど。合鍵は渡したはずなのだけれど…おかしい。

家に入ると案の定幼馴染がやって来た。

心配させたのだろう目のしたに隈 のように見せかけたメイク が施されている。

なんて手の込んだ心配の仕様なのだろう。嫌味のつもりだろうか。

「ハレ！勝手に出て行ったら危ないって何回も行ったよね！」

「ただいま」

「おかえり！スツゴク心配したんだよ！」

黒髪黒目のショートカット。今時は滅多に診られない大和撫子である。

彼女の名前は安立彩^{アタチ サヤ}。学生兼陰陽師という特殊な職業を持つ幼馴染。一年前くらいに空巢市の実家に帰り、それから度々やって来る。

日本政府からも超売れっ子の陰陽師であるにも関わらず、彼女はその仕事を休業して俺の世話をしてくれている。

世話焼きが講じてピッキングや不法侵入という犯罪臭いことにまで発展してしまっただが、彼女自体は嫌いじゃない。

「ゴメン…気がついたらまた歩いてた」

「最近多いね。悪霊の仕業かな？」

「どうだろう…わかんない」

「アタシが何とかできたらいいんだけど…今、アタシ調子悪いから大丈夫。彩が傍にいてくれれば俺は大丈夫だよ」

「っ！もう！は、恥ずかしい事言わないでよ！もう寝る！」

何が不満だったのか怒って奥に引っ込む彩。

顔が真っ赤だったが熱でもあるのだろうかと思いつつも俺は自分の部屋に戻った。
明日の朝に玄関の扉について問い詰めようと心に決めての二度寝に入った。

翌朝、用意された朝食のメニューは焼きシヤケとご飯とお味噌汁だった。

今日も彩のご飯は本当においしそうだ。席に着いて、朝食を食べながら扉の事を聞いた。
彩は少し渋っていた様子だったが、そのうち真剣な表情で語り始めた。

「合鍵が合わなかったのよ」

「合鍵…壊したのか？」

「何でそうなるのかな！？理由によっては殴り飛ばしていいよね？」

何故、怒っている？

まさか…この破壊魔神。自覚がないというのか？と新聞紙が張られている玄関の扉を思う。

俺はちよつと驚いたがいつものポーカーフェイスに戻って会話を続けた。

「いや。その気になれば窓ガラスとか扉のドアノブとか妖怪とか壁とか壊すからってつきり」

「妖怪と窓ガラスを一緒の部類にしないでくれる。……はあ。鍵が付け替えられてたの」

「そりゃお前が壊せば付け替えるだろう」

「知らない間に変わってたの！誰かが付け替えたのよ。知らない間

に！」

「ふーん」

「ふーんじゃない！何とか言いなさいよ！不気味だとか！恐ろしいだとか！そーいう恐怖心はないのお！？」

現在進行形で世話焼き行為をしている奴が何を言うのだろう。

四六時中人型の式 陰陽師が使う基本技術。紙を媒体に使う代わりに目で俺を365日24時間体制で全て監視。

風呂やトイレ以外には全部監視がつく。扉の鍵を替えたらいつの間にか合鍵をつけるかピッキングをして入ってくる。

扉を開かないようにすれば窓を割って進入してくるうえに、変な行動をすればすぐさまやってくるという徹底ぶり。

そのくせ何食わぬ顔で洗濯や掃除や料理をしていく彩コイツに比べたら、鍵が勝手に付け変わっているのなんて全然恐くない。

これを世間では「ヤンデレ」と言って一部の人には愛でる対象らしいが、実際はこんなに鬱陶しいんだ。みんな、騙されるんじゃないぞ。

「いや。全然。むしろタダで変えてくれたんだからいいんじゃない？」

「よくない！全っ然よくないから！」

「防犯に関してならお前がやってくれるから問題ないだろ？」

「えっ？…あ、うん。そ、そうなるかな」

「何か問題…ある？」

「ない…けど…いや。ないよね。そうだよ。私がいるんだから…」

「うん。問題ないなら放って置けばいい。あってもなくてもお前には関係ないんだし」

ダンッ！

彩が思いつきりを叩いたせいで食器がちよっと浮いた。

幸い汁物は飲んだ後だったし、こぼれる心配のあるものはなかった。為机は無事だ。

が、困った。彩の額にあからさまな怒りのマークが見える。後ろの般若の仮面も見える。

どうやらちよつとからかいすぎたらしい。よくコロコロと表情を変え、うえに怒りの沸点がよくわからない奴だ。

真実を言っただけなのに何故そんなに怒るのだろうと思いつつも、食事を没収される前に全て平らげて食器を運んだ。

それから怒り心頭の彼女の前で正座をして、三つ指ついて深く頭を下げての一言。

「調子に乗ってすみませんでした」

「……今日の晩御飯抜きだからね！」

よかった。昼飯は食べさせてもらえるらしい。

俺はどうでもいいことに安堵しながらも、日常からすでに歪んでいる人生をもっと歪める自体が起きるなんて予想もしていなかった。

二度あることは三度あるという。

時刻は朝の11時。とっくに学校に行っているはずの時間。

授業は今頃三時間目くらいだろうか？と思考しながら俺は青空を眺めていた。

小さい頃、幼馴染と来た事がある公園でだ。

俺の名誉の為に言っておくが、決して自分からサボろうと思ったわけではない。

冒頭と同じく「気がついたら」この場所にいた。サボろうと思ったわけじゃない。

大事な事だから二回言ったんだゾ。日頃から俺はサボタージュする

ような不良ではない。

最近の夜中の事といい。俺は一体どうしてしまったのだろうか
真剣に考える。

夜中に関してはいつも道で誰かに呼び止められるか歩道される為、
どこに向かおうとしているのかの検討は全く付かない。

今回はその分目的地が明確だった。「気がついたら」公園のベンチ
に座っていた。

今までの道筋ももしかしたらココを目指していたのかもしれないが、
生憎詳しい道までは覚えていないので確証はできない。

次に、この公園に何故来ようとしていたのか？

この公園にそれほど深い思い出などはない。あっても幼馴染と遊ん
でいた事くらいだ。

他に思い当たる事に心当たりがない。大きな怪我もしたことがなか
った。

俺に心当たりがないという事は「誰か」の心当たりはあるという事
だろうか？

「誰か」こと犯人は俺に何らかの恨みを持っていて恨みを晴らす、
または「目的」を実行する為に俺をココに呼び出した。

とすれば俺の死亡フラグは確定だな。ここに来てしまった時点でア
ウトだ。

かれこれきつと二時間くらいココにいるが何も起きてない事から不
気味さはちよつと増す。

一体犯人の狙いは何なのだろうか？

「おい」

「……………びっくりしたあー」

「全然ビツクリした顔してないぞ」

突然声をかけられて驚いた。それほどまでに集中していたのだろ
う。

見れば夜にあつたお姉さんと同じ学校の制服だった。腕には腕章をつけている。

この町の自治組織の属している人だというのは一目でわかった。

男の背は俺より頭一つ分くらい大きくて、スラリと長い足がちよっとムカつく。

滅びればいいのに。

顔もそこそこイケメンでダークブラウンの前髪を上書き上げるようなオールバックでどこかワイルドな感じのイケメンだった。滅びればいいのに。

俺を見下ろすな。影で覆うな。ガタイしっかりしてんな。スポーツ選手かモデルかこの野郎。

早く死んで欲しい人種だと思った。以上がこの初対面の男を現す表現である。

「こんなところで何をしている？学校はどうした？」

「そのセリフをバットでそのまま顔面直撃テットボールにしてやりますよ」

「俺は委員長に借り出されてるから仕方なくだ。で？お前は？」

「サボタージユじゃないです。」「いつの間にか」「こんな所にいたんですよ」

「「いつの間にか」で公園に来て、コーヒーを飲むのか？」

「コレは「気がついた」後に買ったものです。疲れたので」「そうか」

男はこんなデタラメな話を聞いても平然としていた。

普通こんな話ウソだと疑うだろう。どいういう神経を持ち合わせているのだ。

男の無知さ加減に呆れながらも、俺はコーヒーを飲み干してゴミ箱に投げた。

思った以上にうまくはいつて小さな満足感を得られたら、この男か

ら離れる事にした。

ここで補導されるのなんて困るうえに彩にバレたらイロイロと面倒になる。

決して逃げるわけではない。この男の為を思つての親切心である事を忘れてはいけない。

うちのヤンデレは俺に少しでも接触してきた他人を容赦なく襲い始めるので他人とのコンタクトは本当に最小限に留めなければならぬ。

なのだが…。

「待て。まだ終わってない」

「俺は終わりました。学校に行きたいので離してもらえませんか？」

「なら俺が学校まで送る。また「気がついたら」別のところに行つてしまつたらいけない」

「それはありがたいですが……お仕事は？」

「町の護りが俺の仕事だ。これも仕事のうち。何なら俺が先生に何とか言つてやる」

「それは助かります。俺が変な所に行きそうになったら止めて下さい」

考え直した。こんなイケメンは早くいなくなつてしまつた方が世のブサメンの為だ。

彩が始末してくれる事を心から願つて同行を求めれば、気のいい男はすぐに了承して歩き出した。

「俺は^{オオカミ}大神^{カナメ}要だ。高校二年」

「晴智晴之です。中学三年生。来年、貴方が行つてる高校を受けます」

「後輩か…気の毒に」

「学校嫌いなんですか？」

「嫌いだな。歩くだけで女子は叫ぶし、男子からは地味な嫌がらせされるうえに教師からの嫌味攻め。うんざりするな」

「改めて貴方に殺意が湧きました」

「唐突に毒舌だな」

しまった。つい本音が漏れてしまった。

後半二つはともかくとして女子に人気なの何がいけないというんだ。

俺なんて彩以外の女から声すらかけてもらったことがない。うえにかけられないのに。

あつ。いや…この前初めて彩以外の女子と話をしたけれど。職質だったが。

「大神先輩のところに黒くて長い髪の女子の知り合いとかいますか？」

「神坂コウサカの事か？」

「コウサカ？」

「空巢町内に住んでて知らないのか？空巢町風紀委員の委員長。神坂かぐや」

「この町は風紀委員によって守護されてるんですね。警察は役立たずだなあ」

「役立たずって事はないがやる気がないのは確かだな。おかげで犯罪の発生率は全国で少ない方だぞ」

「そうなんです。世の中の事とか全然興味がないので知りませんでした」

「みただいな。アイツの前で犯罪行為をしたら容赦なく木刀で殴り殺されるから注意するように」

「わあ。暴力によって生まれる平和のなんと空しい事かー」

「同意見だが棒読みで言っても誰の心も動かせないぞ」

この町の平和が一人の学生の武力によって保たれていた事にちよつとした不安を覚える。

大丈夫か空巢町。大丈夫か今後の日本。不安が多すぎてこれじゃ年越せないかもしれない。

まあいいや。自分が住んでいる範囲、生活する範囲、見ることができる範囲で面倒事が起きなければ今この瞬間誰がボッコボコにされていようが気にする事ではない。

どうでもいい事を考えていると、携帯のバイブに気がついた。長さからしてメールみたいだ。開いてみればメールが50件ほど入っていた。

内容も差出人も全部同じ。安立彩からだ。まあそうだろう。俺が先に出たはずなのにまだ学校についてないとわかれば慌てるに決まっている。

陰陽術だつて搜索範囲に限界がある。今の俺はその搜索範囲外に出ているから彩はメールを送り続けている。

『今どこにいるの？返事下さい。大至急』

いらぬ心配をかけたようだ。とりあえず返信するとすぐに返事が返ってきた。

最近の子供は返信が早いなあと爺臭い事を思いながら文面を見る。

『隣にいる大男は誰？』

おっと。どうやらこの辺は彩の式が活動できる範囲らしい。

もう大神の事に目を付けられた。俺的にはこの男がどうなるうと構わないので当たり障りのない文章を打って返す。

『町の風紀委員の人らしい。俺を学校まで送ってくれそうだ』

送信。ブブツ。受信。

『ダメだよ。その人はダメ。絶対に連れてきちゃダメだよ。ハレ！』
『何で？』

送信。ブブツ。受信。

『その人は何かに憑かれてる！ハレが近寄ったら危ないし、この範囲だと私は手出しできないよ！離れてハレ！』

「……は？」

「どうかしたのか？」

「……いいえ。何でもないです」

彩は陰陽師だからわかる何かがあるのだろう。

生憎俺には幽霊も妖怪も見えないし、出会ったこともないので確証は得られないままだが彩が日本屈指の陰陽師である事は認めている。故に妖怪や幽霊の存在は信じている。摩訶不思議な存在がこの世の中にはいるのだろうかという事はわかっていた。

しかし、隣にいる男からは俺は何も感じない。本当に『何か』に憑かれているのか？

憑かれていたとして、俺に何の危険があるのだろうか？

『憑かれてるって何？俺、もしかしてピンチ？』

送信。ブブツ。受信。

『今は大丈夫そうだけど、早く離れる事に越した事はないよ！離れて！早く！』

「メール打つの早いんだな」

また突然影が覆った。大神が携帯の画面を覗いていた。俺はつい携帯を隠した。メールの内容なんて他人に見られるほど恥ずかしいものはない。

何にしる変な疑惑が上がった以上、警戒する事に越した事はないと思っただ。

「恋人か？」

「幼馴染です。100件くらいメール来ててびっくりしました」

「それはもうストーリーカーの域だろう？」

「すとかー？何ですかソレ？別に普通ですよ。」

メールの100件や200件くらい当たり前じゃないですか？

俺の方が先に家を出たのにまだ来てないって事は心配してこれくらいメール送る事だってありますよ」

この言葉に大神はあからさまに表情を歪めた。

この行為の異常差に対して今更何を驚く事があるのだろうか？

まあさすがに今回は心配させすぎたなあと反省していたから後で何か機嫌を直す口実を作らなければくらいしか考えていない。

こいつの重度の世話焼き症候群の何か異常だということのか？

「……幼馴染とやらは他には何かしてないのか？」

「他にはって？」

「家に勝手に侵入したりとか、部屋の中に盗聴器とか仕掛けたりとか」

「後者はわかりませんが、前者は日常茶飯事……っていつか毎日ですよ。」

扉の鍵付け替えてもどこか壊して入って来るのもう合鍵を渡す事になっています」

「おかしいと思った事は……変だと思った事はないのか？」

「アイツの世話焼きはずつと昔からあぁなんですよ。俺が事故にあつてからちよつと度が増したような気がしますけど…変だとか思った事は一度もないです」

大神の顔がさつきより険しくなった。

イケメンが怒ると迫力あるなぁなどと思いつつも、俺はちよつと逃げるように歩を進めた。

大神の顔が恐いのもあったが、同時に不安になった。だから逃げた。俺はおかしいなんてこれっぽっちも思っていない事がおかしいと言われているようだと思った。

「おい。晴智」

「な、何です…：…か？」

俺は大神の声に釣られて後ろを振り向いたはずだった。

たった数歩しか離れていない距離で振り向けばあの大男が険しい表情をして立っているはずだった。

けれど、振り返った先に大神の姿はなく夕焼けに沈む果てのない道路しかなかった。

「大神：先輩…？」

真つ赤な夕日が周りを赤く染める。

幻覚でも幻でも白昼夢でもなく、俺はそんな空間に立っていた。

状況 1

浮浪する少年？（後書き）

初めまして初投稿の春寝暁ハルネ アキラです。

オリジナル小説は初投稿なので、皆さんが楽しんでもらえたらとても嬉しいです。

更新はかなりまちまちになるとは思います。精一杯頑張ります。

状況1 浮浪する少年？

状況1 浮浪する少年？

あたり一面が真っ赤だった。

それが夕日に照らされているからか、辺りに充満する卵が腐ったよ
うな匂いがする素が原因なのかはわからない。

けれど、少ない判断状況から俺は変なところに迷い込んだと悟った。
携帯で確認した時刻はまだ朝の11時頃だった。

夕焼け空にしても早すぎる。弁当だって食ってないのに理不尽では
ないだろうか。

こんな世界に来て弁当の心配をする自分に呆れながらもとりあえ
ず進む事にした。

「しかし……ここはドコなのだろうね。一応町内っぽいけど何か違
う感じがするし」

人の気配が全くしないどころか人っ子一人通らない。

一応自分は外にいる。いくら人気がないと言っても、この場所はお
まりにも静か過ぎた。

音も気配もないゴーストタウンをしばらく歩いて行くと、コンビ
ニの前に来た。

ガラスの向こうには誰もいないし、何も無い。店員も商品も雑誌さ
えもない。

あったとしてもココにある食料はあまり食べたいとは思わない。

俺が探したのは公衆電話だ。コンビニの前にある小さな公衆電話。
小さな白熱灯が点滅を繰り返すボックスの中に電話はあった。

財布から小銭を取り出して、彩に電話をかける。他に電話をかける
人間もいないし、仕方がないだろう。

プルルルル…プルルルル…

繋がった！

これで連絡が取ればどうにかなるだろう。

『はい…もしもし…』

「もしもし？彩？」

『お腹…空いた』

「彩？」

『お腹空いた…お腹空いた…お腹空いた…お腹空いた…』

『……………食べて…いい？』

ガチャン！！

「ダメに決まってるだろ！」

明らかに異常な環境の中、明らかに異常な電話に対して俺はツッコミを入れた。

ダメだ。この電話は使えない。あれは冥府への公衆電話な感じがす

る。

ソレを思うと恐くて電話ボックスにはもつと入れない。後ろにベチャとかグチャとかしたものがいたら悲鳴は上げないがきつと気絶するだろう。

自慢じゃないが俺はグロ系は無理だ。ホラーなら大丈夫だけどグロいのは無理！

どうしよう。かなりヤバいところに迷い込んでしまった気がする。俺はカバンを両腕で抱いて、恐怖を抑えようとするがあまり意味はない。

「ついツッコミを入れてしまった…俺もあのお姉さんの事言えないな」

何て暢気な事を言ったが、現状は変わらない。

携帯も通じない。公衆電話は冥府へと繋がっている気がする。大神とも離れた。

さあ。この状況をどうやって切り抜けようと考えながらも足は止まらない。

今はとにかく「人間」に会いたかった。

またしばらく歩き続けるがやはりどこまで行っても人影一つ見当たらない。

どこまで行っても住宅地、赤い夕日、電柱などに映る影、影、影の無限ループ。

ちよつと絶望しそうだ。頼む。誰か誰かいないか？

「……も、もしもーし」

耐え切れずに誰もいない町に向かって、小さな声で呟いた。

大きな声でこれを街中で言うのはちよつと勇気がある。そんな勇気は俺にはない。

小心者と笑うがいさ。お前達に俺と同じ状況に立って同じ事ができるならな!?

「はぁーい」

「えっ…。今のごっこ?」

「ココだよ。ゴミ箱の中」

「ゴミ箱?」

かくれんぼでもしているのだろうか?聞こえたのは小さな子供の声だった。

ある団地の外側にあったダストボックス。蓋を開けば確かに声の主はいた。

可愛らしい顔をした女の子だった。年頃的には幼稚園児くらいの子供だった。

「だった」というのは少女の首から下はすっかりなくなっているのにも関わらず、少女はゴミ箱の中で笑っていたからだ。

「……………」

「お兄ちゃん。見つけてくれて有難う!」

「どう…いたしまして」

「あっ。でももう一つお願いがあるの」

「何?」

「身体を探して欲しいの。きつとどこかを彷徨ってると思っただけど」

「…………へえ。そっかぁ。この世界は肉体と頭が離れても彷徨えちゃう世界なんだ」

「異世コトヨだもの。当然だわ」

異世。それがこの世界の名前。

イロイロ狂った何かが蠢く世界の名前。

誰がそう名付けたかは知らないが言いネーミングセンスをしていると思う。

俺は首だけ少女にお別れを言つと静かに蓋を閉めて、ゴミ箱から走つて逃げた。

身体探してつて言われたけど無理に決まっつてんじゃん！つていうか何で首チヨンパされて堂々としていられるわけ！？意味わかんない！！むしろソレが当たり前つてどういう世界なんだマジで！？

頭が混乱する。どうすればいいのかわからず目的地もなくただ我武者羅に走り続ける。

とにかく走つた。風のように。疾風のごとく。真つ直ぐ真つ直ぐ一直線に。夕日が傾く道を走る。

どこまでも、どこまでも、どこまでも同じ景色が流れる気がしたが道に終わりは一行にこない。

もしかしたらずっとこのまま夕日が傾く道に取り残されて一生を過ごすのだろうか。

「そんなの…嫌だ！俺は帰る！帰りたいんだあ！！」

誰もいない無音の町で一人の少年の叫びが木霊した。

俺は疲れ果てて道端に座つていた。

ああ。ダメだ。なんて名前だったか忘れたけど犬…俺はもう一歩も歩けないよ。

せめて最後に彩の弁当が食べて、家でダラダラして、ベッドの上で死にたかつた。

大往生は憧れだ。自宅の布団の上で死ぬるなんて最高じゃないか。

まっ。こんな異世界では関係のない話だ。俺は道端に蹲り、さっきの少女のように首と胸がお別れした状態でゴミ箱に放置される運

命なのだろう。

大きな溜息をつきながら道端に蹲る俺は、なるべくスペースを取らないように座り込んだ。

その時…。

「ねえ。貴方…大丈夫？」

「ふへ？」

「あらあら…酷い顔。こっちにいらっしやい」

声をかけてきたのは40代くらいの女性だった。

優しそうな面持ちで俺の手を引く。不思議と恐いという感覚はしなかった。

何でだろう？俺の感覚が麻痺して来たとか？これが天からのお迎えとか？

ああー……事故のショックか母さんの思い出つてあんまりないからよくわかんないんだけど、母さんがいたらあんな感じなのかな？

俺は手を引かれて、公園にたどり着いた。

公園はさつき俺がいた公園だった。家の塀ばかりだと思っていたがちゃんと公園はあった。

女性は公園の水道でハンカチをぬらすと俺の酷い顔を拭いてくれた。

「あ、あの…」

「何？」

「すみません…ご迷惑かけて。有難うございました」

「いいのよ。それよりどうしてこんな場所に？ここは人が来るような場所ではないわ」

「やっぱり…そうなんです。でも出口わかんなくて…」

「簡単よ。帰りたいって思ったらここからは出られるの。そういう空間だから落ち着いて心の整理をしなさい」

「帰りたいと思ったら…出られる？」

では今まで出られなかったのは帰りたと思う気持ちが必要なかったから？

それとも俺自身が帰りたくないとかどこかで望んでいたからか？
そうだ。あの時俺は、大神に変なことを訪ねられてここにいたくないと思った。

大神とこれ以上話したくなかった。だから…俺は…。

「この世界に引き込まれた？」

「心当たりがあったようね。ならもう出られるわ。大丈夫。

誰に何を言われても貴方が貴方であることは変わらないのだから。自信を持ちなさい」

「…はい。有難うございます」

「もう大丈夫？しつかり歩けるかしら？」

「はい。歩けます」

「ならいいの。頑張つてね」

俺が大丈夫だと言ったのに安心したような表情を浮かべて彼女は俺から離れていく。

「ちょっと！危ないですよ！貴方も一緒に…」

俺は手を伸ばす。この世界に来て優しくしてくれた彼女に触れようと手を伸ばしたはずだった。

しかし、手は何もつかめない。何も触れられずに彼女の身体を通過して彼女は消えてしまった。

まるで初めから誰もいなかったように消えてしまった彼女。

アレは俺が見た妄想の産物なのか、はたまた狂った世界の住民だったのかは定かではないが気を取り直す事にした。

シャ コ

気持ちを新たに駆け出したいと思った。
こんなところで死にたくない。死ぬだったらベッドの上か布団の上での大往生だ。

シャ コ

後ろに聞こえる不気味な音は無視して進もう。
ただし足は早足だ。競歩に近い速度で風のように……。
ヒュッ！という何かの音と共に俺の隣に大きな鋏が刺さった。

「な…んだってんだよ！チクショー！！」

俺は全速力で走り出した。

後ろからは俺を追ってくる足音。ヒタヒタという音から相手は素足だ。

一瞬しかみなかったのだからなかったがあの鋏はやろうと思えば人の首くらい簡単に切れた。

理解した。アレが少女の首を切った凶器であると悟った。

それをやった犯人が後ろから俺を追いかけてきている。

逃げなければ冗談抜きで死ぬ。あれ？もしかしてさっきのおばさんはこれがわかって俺より先に逃げた？

まさか！あんなに優しくしてくれたおばさんがそんな事するはずないじゃないか！！

いや、でも…可能性が完全に否定できないのが何か悲しい。

人間ってかくも薄情な生き物だったのだと、今するべきではない人生の心理を一つ習得したところで足を何かに掴まれた。

俺はそのまま地面に激突。それはもう漫画のように顔面を地面に強打した。

痛む顔面を押さえながら俺の脚を掴んだモノを見て、絶句し後悔した。

「ソレ」もまた人間だった。「だった」というのは前と同じような意味だが、今回は逆だった。

歳はさつき出会った少女と同じくらいの年頃なのだが、今回は少年だった。

ただ少年には顔が判別できる頭が付いておらず、胴体だけ。しかも沼地から上がってきたようにドロドロになった身体で俺の脚にしがみ付いていた。

昔見ていた ケモンに出てくるヘドロに抱きつかれるとしたらこんな感じかと思ったが、右足にへばりつく微妙に生暖かい少年（身体のみ）は俺の脚を地面にとっぷり嵌るように縫い付けた為、押しでも退いても足は抜けなかった。

そんな事をしていると右腕にも違和感を感じた。恐る恐る振り向けば次は少女の身体。

これはさっきの女の子のものかな？と思ったが俺は捕まる前に振り払う。

そのうち数が増えてドロドロになった頭のない子供たちが俺の身体を覆って固める。

自由が利かない。逃げられない。そのうち素足の人物の姿も見えた。

「ハ、ハハ…ハハハハ…何だよ。ココには赤の女王様でもいんのかよ」

俺の身長くらいあろう大きな鋏を持った人物は大神以上の大男だった。

大柄のガタイを覆うのは真っ赤にそまったコート。元の色が何なのか区別なんて付かない。

そして、案の定男の肩から上は存在しなかった。彼は、彼もまた「

白銀に煌く太刀の刃が大男を切り割いた。

「ゴフツ！」

俺はうめき声を上げた。突然、腹に押し掛かった重力によって……

そんな事を気にせず、少女は、自称魔法少女は、男に切りかかっていった。

斜め上からの袈裟切り。刃は確実に男の心臓を斬った。

男はそのまま地面に倒れ込む。それを見越した魔法少女はまだ太刀を振り上げて、男の死体を滅多刺しにしまくった。

「ゲホツ…ゲホツ…！」

「大丈夫ですか？手をどうぞ」

駆け寄ってきたのはオレンジ色のような髪色をした青年だった。年齢的には大神と近い。とても物腰が穏やかな青年は俺の手を取って起してくれた。

いい人そうだと思う。子供なんかは進んで近寄って来るだろう。片手にサブマシンガンなんて持っていなかったら話だが。

「あ、有難う…」ミツルギレンヤ「ごじます」

「どういたしまして。俺は御剣鍊弥。君の名前は？」

「晴智…晴之…」ミツルギレンヤ「あの」

「何ですか？」

「柄の事…お聞きします…けど…人間で…いいんですよね？」

「はい。僕達は真正正銘人間ですよ。辛かったですしょう？もう大丈夫ですからね」

俺の頭を優しく撫でる鍊弥の手にちょっと泣きそうになった。ちゃんと人間の暖かさを持った手だった。それが嬉しくて泣きそうになる。

恥ずかしいからそんな事は絶対にしないが、今はその手の暖かさを感じていたくて鍊弥の手を握った。

「ったく…何で情報が入って来ないんだよ。」

欠けた死体が出た時は知らせるってハゲ医院長には耳タコできるほど言っただのに！！」

ちょっと我侬を言わせてもらうなら怒りに任せて男の死体を滅多切りにする彼女の声や肉を切り裂く音がしなければもっとよかった。やがて満足したのか、彼女は戻ってきた。

顔に飛んだ返り血を袖口でふき取り、俺を睨みつける。

「僕は、ミツルギ シノブ御剣 忍。君は僕達『鴉』が保護する。拒否する事は許さない」

「『鴉』？」

「覚えていなくていいですよ。ココに出て記憶処理を受けたら忘れてしまう事ですから」

「は？何？記憶処理って…何？」

「いいから。コレ付けて。黙って僕達に着いてきてくれないかな？この後、病院の医院長シメて来ないといけないから。早くしてくれる？ノロマ」

渡されたのは銀色のアクセサリ。チェーンで出来た腕輪だった。先に変わった形の飾りがついているが言われたとおりにつけるとかなり安心感が出て来る。

何かのお守りなのだろうか。いや。そんな事よりもだ。

「あの…御剣さん？」

「てすか何？」

「すみません。錬弥さんの方です」

「チツ。紛らわしい真似すんじゃないよ」

「どうかしましたか？」

「いえ。その…もうあの首なし鉄は出てこないんですよね？」

俺達は助かったのか？と暗に聞いたつもりだった。

その質問に対して錬弥は微妙な表情をする。まさに苦笑と言ったような表情だ。

「残念ながら…しばらくしたらまた復活するでしょう」

「マジ？」

「ああいうのは早く滅してしまいたいのには山々なんですけど…恨みが深いまま強制的に滅してしまったら浄化にかなりの時間を食うんです」

「それって…魂の浄化的な奴ですか？」

「そうですね。なのでああいうのは封印してしまうか、時間はちよつとかかりますが恨みを解消させるという方法を取らないといけません」

「じゃあ封印すれば良くないですか？」

「だったら君がなればいいんじゃない？君が、アレを封印するための人柱になれば万事全てはうまくいくけれど死にたいの？」

「……ごめんなさい」

自称魔法少女こと御剣忍には頭が上がりないと思った。

つまりは二人はあの男を無事に成仏させる為に男の首を捜していた。彼を納得させる為、自分の失くした部位を、欠けた部位を見つけ出す為に探していた。

それは元の世界のどこかに落ちていて、彼らはそれを探す為に行動していたという。

「それで…どうして俺を？」

「たまたまだ。僕達がたまたま異世に入って見つけたのがお前。ただそれだけだ」

「たまにいるんですよ。こういう「存在するだけ」の空間に迷い込んだんじゃない。」

「この世界は何の目的もなく、ただあの男が首を刎る為だけに生まれた世界。」

俺達がココに来たのも首を見つけるヒントがあるかもしれないっ
ていう思いつきだけですから」

「存在するだけの世界？」

「細かい事聞いたってわかんないと思うからこれ以上の説明は却下する。」

以後、許可なく口を開いたらその首を刎ね飛ばすから注意するよ
うに。以上」

「（なんて横暴な…）」

「忍ちゃんカツコイイツ！もつと言って下さい！」

「当然だろ。兄貴」

「（なんて残念な…）」

顔を赤らめて妙な動きをしながら妹（仮）を賞賛し続ける兄（仮）
に失望した。

さっきまでの優しそうなお兄さんはシスコンでMだった。

でもって、カツコよく俺を助けてくれた少女は魔法少女でSだった。

そんなやり取りに溜息をついたら肩の力が少し抜けた。

ちゃんとした人間のやり取りを見てここまで安堵したのは初めてだ。
人間一度は体験すべきだろう。こういう小さなことを俺は大事にし
ていこう。

そんな思いを胸に抱きSMプレイチックな会話を聞きながらも、異界から出ようとした時だった。

「錬弥さん？忍さん？」

二人の動きが止まった。

二人の影から二人が見ているモノを見た時、俺の動きもまた止まった。

『首…ヨコセ』

さっきの奴が立ちはだかっていた。

状況 1

浮浪する少年？（後書き）

二話です。遅くなって申し訳ないです。

プロト通りなら兄妹はもうちよつと後だったんですけど予定を変更しました。

誤字脱字報告や感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4898z/>

空巢の風紀委員

2011年12月18日01時52分発行